立ち読み版

特集

診断士試験
―とある応援者からの心揺さぶるコトバたち

診断士1次試験終了――。
第一の闘いは終わった。
しかし，息つく間もなく，2次試験，
あるいは来年度の再挑戦に向けた
闘いが始まる。
闘い終えてすぐさま
自身を奮い立たせるのには，
大きなエネルギーを必要とする。
自身の力だけでは限界がある。
誰かの支えが必要だ。

本特集では，合格者たちが
応援者から贈られて心揺さぶられた
数々のコトバたちに焦点を当て，
読者の元へお届けする。
さらなる大きな闘いを控えた
受験生たちへ――。

吉原伸二さん
「逃げたらそれまで，あきらめたらそれまで」
――家族とともにつかんだ17年越しの合格
◎小寺暁子

小久保和人さん
「力を抜いたほうが受かるかもよ」
――自分のやり方とペースを重視して
◎伊藤孝一

中田麻奈美さん
「頑張り屋さんなところが好き」
――友人との絆が元気の源
◎川上宏司

村木麻衣子さん
「業務に活用してみたらいいよ」
――目標への原点回帰でモチベーションを維持
◎川上宏司

小林大介さん
「それは家族よりも大事なことなの？」
――葛藤の中で気づいた「大事なこと」
◎古賀雄子

高橋祐介さん
「笛を吹いて自分も踊れないとダメ」ほか
――きっかけを与えてくれた3人の伴走者
◎古賀雄子

岡村恵望子さん
「あきらめたらあかん。そこであきらめたら終わりやで」
――SNS仲間と支え合いながらの独学でつかんだ合格
◎廣瀬達也

柳田有香さん
「自分を活かしきって死ぬのが最高の人生だ」
――コトバをもらうのではなく，自身の内側を見つめる
◎廣瀬達也

【取材後記座談会】
合格までのプロセスで学んだ大事なこと
伊藤孝一×川上宏司×古賀雄子×廣瀬達也（五十音順）
◎司会・文 小寺暁子

特集 診断士試験 ―とある応援者からの心揺さぶるコトバたち 1

吉原 伸二さん
「逃げたらそれまで，あきらめたらそれまで」
―― 家族とともにつかんだ17年越しの合格

小寺 暁子
中小企業診断士

「合格ラインの手前で止まってしまっていたのを，ようやく一歩またげたことで，ここに自分の番号があるんだなぁと感じました」と語るのは，17年間にも及ぶ受験生活を経て平成27年度診断士試験に合格された吉原伸二さん。出張先の電車内で合格発表を確認した際は，何度も受験票とにらめっこしたという。

本章では，この長い長い受験生活を適度な距離感で支え続けてくれた「とある応援者」の存在について伺った。

＜吉原さんの受験歴＞
◆開始年度　平成11年度（制度改定前）
◆合格年度　平成27年度（合格まで17年間）
◆学習スタイル　平成13・14年度は予備校に通学。その後は基本的に独学
◆とある応援者　奥様

1 あきらめないで続けるという決意

――とある応援者（奥様）からのコトバが贈られた当時の状況を教えてください。

コトバをもらったのは，平成14年度の２次試験で不合格だったときです。その年はかなりの時間勉強し，全国模試でも１位になるなど，客観的に見ても合格の確率が高い状況だったと思うのですが，結果的には不合格。自分でも合格できると思っていましたので，そのギャップが一番大きかったんです。だから本当につらくて，受験をやめようかとまで思ったのが平成14年度でした。

当時，育ち盛りの子どもが３人もいましたので，これ以上家族を犠牲にすることはできないと思い，家内に「もうやめようかなぁ」とこぼしたんです。

――そのとき，具体的にはどのようなコトバをかけられたのですか。

落ち込んでいるのを励ましてもらえると思ったら，まったく違いました。「あと少しで合格したかもしれないんじゃないの？ いまやめるのは，惜しいと思うよ。お父さんがやりたいのなら，家族は皆で応援するから大丈夫」と返されたんです。

私は，「いまやめたら，すべては終わり」という家内の叱咤を支えに，勉強を再開することにしました。家内はわかっていたんですね。「勉強を続けたい」という私の気持ちを。

そして，家内はそのコトバどおりに，夏～秋にかけての家族のイベントを我慢してくれました。試験当日の手づくり弁当には毎年，「お父さん，頑張れ！」という手紙を入れてくれていたのです

続きは雑誌で⇒